

7月12日 原稿 能城一郎

タイトル：互いに重荷を担いなさい。

聖書箇所： ガラテヤの信徒への手紙 6章1節～10節

はじめに、ガラテヤ 6章1節～10節をお読みします（新共同訳聖書）。

◆信仰に基づいた助け合い

6:1 兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、“霊”に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。

6:2 互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。

6:3 実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思ふ人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。

6:4 各自で、自分の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対してだけは誇れるとしても、他人に対しては誇ることができないでしょう。

6:5 めいめいが、自分の重荷を担うべきです。

6:6 御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。

6:7 思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。

6:8 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。

6:9 たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取るようになります。

6:10 ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。

新共同訳聖書のこの箇所の見出し語は、「◆信仰に基づいた助け合い」、聖書協会・共同訳は、「◆互いに重荷を担いなさい」、そして、フランシスコ会訳では、「◆兄弟としての交わり」となっています。

どの見出し語もクリスチャンの心に響くものです。「信仰に基づいた助け合い」と聞いて、皆さんは、何を思い浮かべますか。また、「兄弟としての交わり」に加わっていますかと問われたら、皆さんは、今、どう答えますか。今日のメッセージのタイトルは、2018年に日本聖書協会から頒布された聖書協会・共同訳の見出し語に倣い「互いに重荷を担いなさい」とさせて頂きました。

1節は、ある性格の持ち主に対する警告で始まっています。その性格とは、何でしょうか。それは、罪に陥っている人を「正しい道」へ戻したいという気持ち、すなわち、正義感とも言えるでしょう。その正義感も「誘惑」の罠にかかると、罪惡に変化してしまうのです。この「誘惑」に陥らないためには、どうすればよいのでしょうか。1節の最後には、「自分に気をつけなさい。」と強く指示されています。

「気をつける」の原語の意味は、「目標に目を注ぐ」ということです。パウロが、「気をつけなさい」と命令形で指示する読み手は、御靈に導かれ、正しい道を歩んでいる「兄弟たち」です。このキリストにある「兄弟たち」は、聖書的な人生の目標を心に宿されています。しかし、その人も何らかのきっかけで、「誘惑」の罠にはまると、聖書的な人生の目標を見失ってしまい、正義の人から罪惡の人へと世間の目の評価が180度、変わってしまうのです。

そうならないための対処法が、今朝のメッセージのタイトル、2節の奨めのことば、「互いに重荷を担いなさい」であります。「互いに」は、自分だけでない、他の人との繋がり、絆、連帯を現している言葉です。自分だけで、「担う」のではなく、他の人の助けをおかりして、あるいは、他の人を助けて、互いの「重荷」（複数形）を担いなさいとパウロは、命じています。

最初に、2節の「互いに重荷を担いなさい。」の「重荷」についてお話します。5節にも、「自分の重荷を担うべき」と、「重荷」ということばがあります。2節の「重荷」の本来の意味（バロス）は、「権威」から来る「重みのある労苦の伴う役割」ということです。5節の「重荷」は、単なる荷物（フォルティオン）です。5節の「自分の重荷をになうべき」の意味を闡明にするために、3節から5節までを、もう一度読んでみます。

6:3 実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思う人がいるなら、その人

は自分自身を欺いています。

6:4 各自で、自分の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対してだけは誇れるとしても、他人に対しては誇ることができないでしょう。

6:5 めいめいが、自分の重荷を担うべきです。

「自分」ということばが、5回、その中で、「他人」ということばが、1回だけ使われます。5節の「自分の荷物」は、自分にとっては大切な労苦を伴う重荷と感じていても、他の人には、それが感じられない、言い換えれば、共感してもらえない重荷なのです。それを、パウロは、「自分の重荷」と単数形で書いています。

一方、2節の「互いに重荷を担いなさい。」の重荷（複数形）は、教会の中で、共感され、皆が大切と認めている愛の労苦が伴う奉仕の数々と言いかえる事も出来ます。「重荷を担う」とは、「仕え合う」、「支え合う」ということです。このことをより闡明にするために、9節から10節をもう一度読んでみましょう。

6:9 たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取るようになります。

6:10 ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。

最後に、1節の後半、「そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。」を観てお話を終えたいと思います。

6:2 互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。

「キリストの律法」ということばは、新約聖書では、ガラテヤ6章2節でしか使われていません。でも、皆さんは、すぐにお分かりになると思います。「キリストの律法」とは、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』（ルカ10:27）を実行することです。

「全うする」(アナ・プレロー) は、「満たす」を強調した言葉で、コップに水を溢れるほど満たす、あるいは、空いている席が満席になる、というイメージの詞です。いくいくつかの聖書翻訳では、「成就する」となっています。「キリストの律法」を行う人で教会がいっぱいになり、愛の福音が全ての人に届けられることを想いつつ、祈りを込めて、使徒パウロは、この手紙を書いたのです。

野球、サッカーは、ゲーム観戦ができるようになりました。しかし、スクラム、タックルといった選手同士が激しく接触するラグビーは、再開がされないままです。ラグビーで勝つためには、「ワン・チーム」にならなければなりません。「One for ALL. All for One.」、「一人がみんなのために！ みんなが一人のために！」の精神が必要です。このラグビー精神は、「互いの重荷を担いなさい」のみことばに、通じると、私は実感しています。

今朝は、ガラテヤの信徒への手紙 6章 1-10 節からメッセージを語りました。ガラテヤの教会に集う異邦人の信徒たちは、「律法主義」に向かわせるという「誘惑」の危機の中にいました。この誘惑から信徒たちを守るため、使徒パウロは、自分を福音宣教者として召して下さったイエス・キリストの声を聴き、6章 2 節を記しました。

6:2 互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。

私たちは、こう願うべきではないでしょうか。互いの重荷を担わせてください。どのような境遇の中であっても、キリストの律法を守らせてください。そのようなクリスチャン達で席が埋め尽くされる、そのような教会とさせてくださいと。

お祈りを致します。